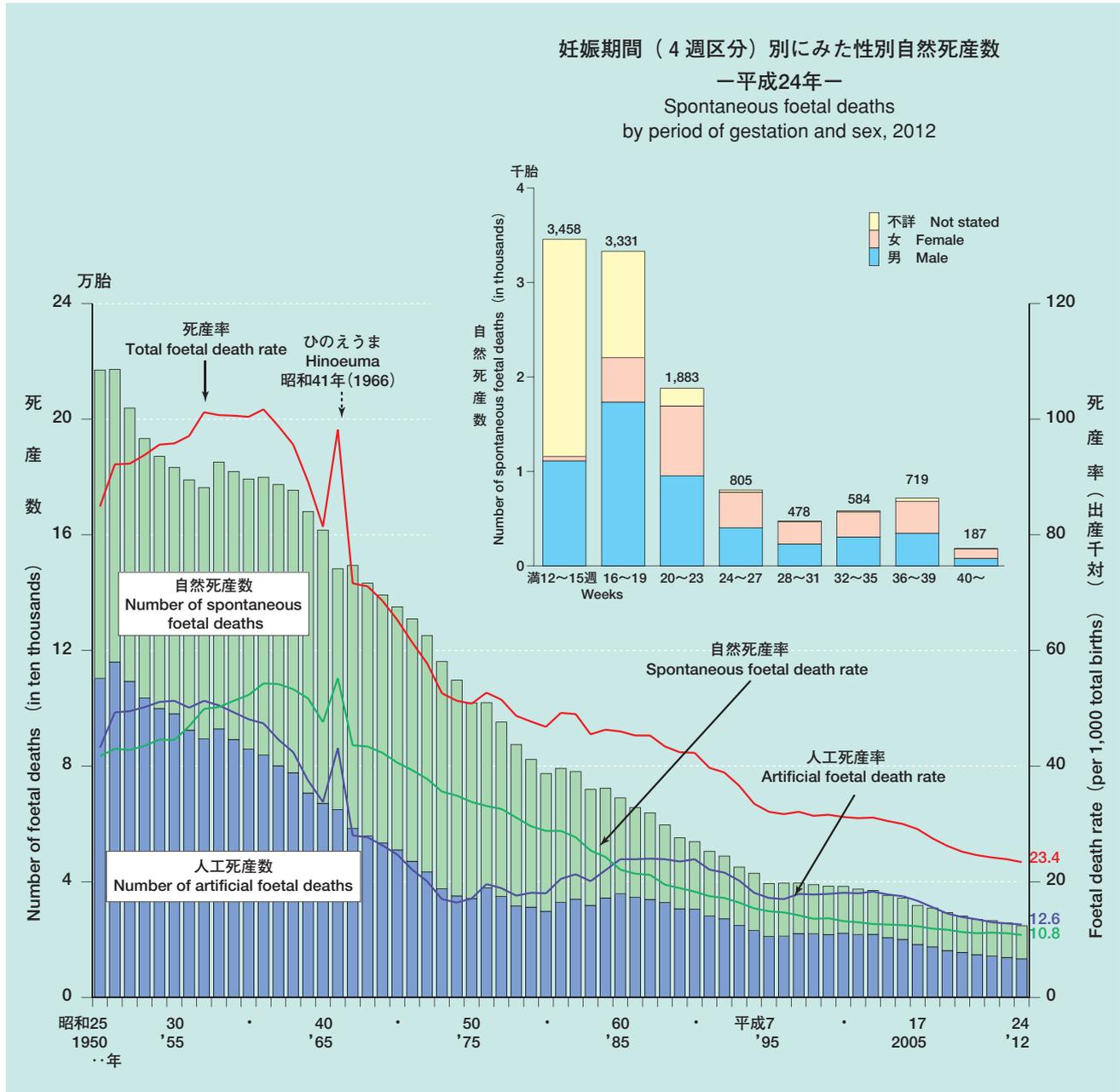


死産の動き Foetal mortality

死産率は低下傾向

死産数及び死産率の年次推移—昭和25～平成24年—
Trends in foetal deaths and foetal death rates, 1950—2012



死産とは、妊娠満12週以後の死児の出産をいい、死産率は出産（出生数と死産数の合計）千対の率である。平成24年の死産数は2万4800胎、死産率は23.4となっている。

死産率の年次推移をみると、全死産は昭和25年から上昇傾向となり、36年にピークの101.7となった。その後は41年の「ひのえうま」の影響を除き低下傾向となり、平成7年からは横ばいで推移していたが、15年以降低下している。

自然死産・人工死産別にみると自然死産率は昭和30年代後半から低下傾向にある。人工死産率は昭和30年代半ばから低下していたが、50年からは上昇傾向に転じ、60年には自然死産率を上回った。63年からは再び低下傾向に転じ、平成6年から14年まではおおむね横ばいとなったが、15年からは自然死産率の低下と比較すると大きく低下している。

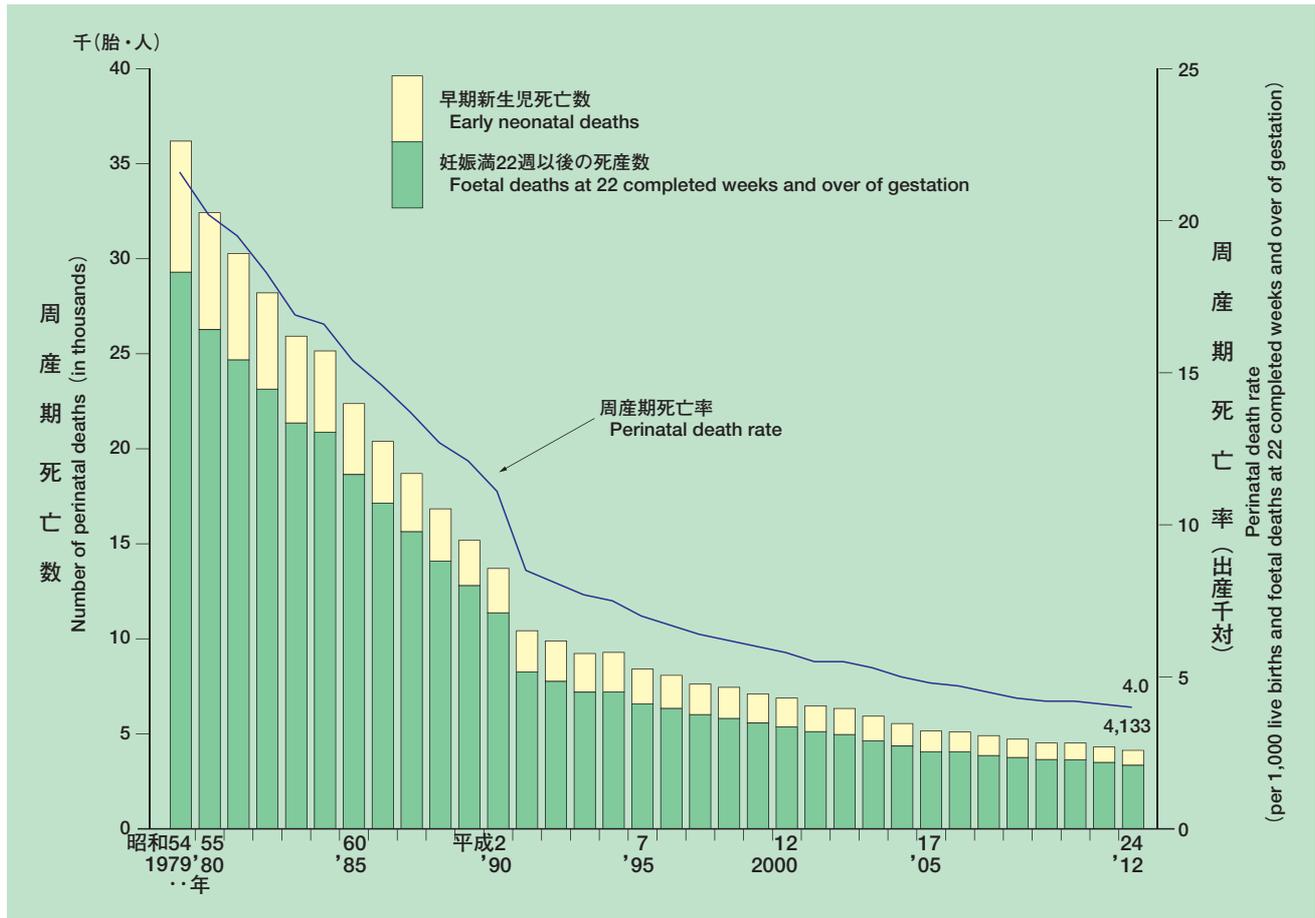
平成24年の自然死産数を妊娠期間（4週区分）別にみると、満23週以前の各期間の死産数が多くなっている。

周産期死亡の動き Perinatal mortality

周産期死亡率は低下傾向

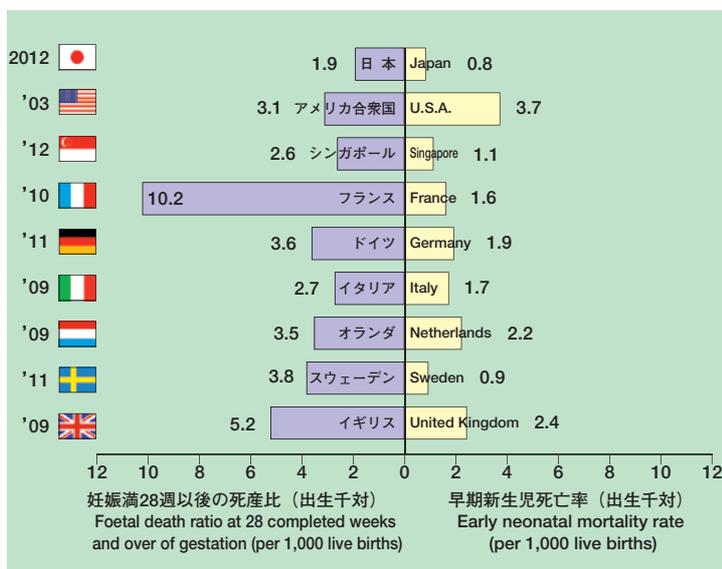
周産期死亡数及び周産期死亡率の年次推移—昭和54～平成24年—

Trends in perinatal deaths and perinatal death rates, 1979—2012



周産期死亡率の諸外国との比較

Perinatal death rates in selected countries



周産期死亡とは、妊娠満22週以後の死産に早期新生児死亡を加えたものをいい、周産期死亡率は、出産（出生数と妊娠満22週以後の死産数の合計）千対の率である。

平成24年の周産期死亡数は4133で、妊娠満22週以後の死産数が3343胎、早期新生児死亡数が790人となっており、周産期死亡率は4.0で、数、率ともに減少している。

我が国の周産期死亡率を諸外国と比較してみると、妊娠満28週以後の死産比、早期新生児死亡率ともに低くなっている。

なお、諸外国との比較では妊娠満28週以後の死産数の出生千対の比を用いた。

注：諸外国は、妊娠期間不詳の死産を含む。
フランスについては、妊娠期間180日以後の死産である。
資料：UN「Demographic Yearbook」